

学習自己評価とその発信が学級経営にもたらす影響について

－小学校における実践事例から－

峯本伸一

(奈良市立伏見小学校)

小柳和喜雄

(奈良教育大学 教育実践総合センター)

A Study on Effects of Self-evaluation System using ICT on Classroom Management.

- A Case of Elementary School -

Shinichi MINEMOTO

(Fushimi Elementary School, Nara)

Wakio OYANAGI

(Center for Educational Research and Development, Nara University of Education)

要旨：教育評価や教育現場におけるアカウントビリティなどへの関心が、近年急速に高まりつつある。学習者の意欲を引き出すことで、教育の効果を高めることのできるような評価のあり方として、どのような方法が有効といえるだろうか。また、学習者にとっての評価をアカウントビリティの観点からとらえたとき、評価情報をどのように有効活用し得るだろうか。本研究は、これらの問いに対して、小学校において実践を試みたものである。授業後の児童の自己評価に着目し、これを電子データ化することにより、評価情報を児童や保護者に容易に発信できるようシステム化した。そして、その継続的な運用が、日々の学習活動や学級経営にもたらす影響や有効性について、児童や保護者の反応などをもとに検討を行った。

キーワード：教育評価 education evaluation、アカウントビリティ accountability、学習自己評価 learning self-evaluation、継続的な運用 continuous operation、タイムリーな対話 timely dialogue

1. はじめに

通知表や指導要録への絶対評価導入、教育活動における指導と評価の一体化の強調など、近年の小中学校教育現場では、教育評価のあり方や方法などへの関心が急速に高まりつつある。学校改革の大きなうねりの中で、より見えやすい形で教育の効果を高めることが求められているが、次の指導方法の改善という本来の目的からすると、今日における教育評価への注目という現状は、当然のながれであるといえる。こうした現状を学習する側からとらえようとしたとき、一つの問いを立てることができる。それは「学習者にとっての評価」の方法への着眼である。学習者の意欲を引き出すことで、教育の効果を高めることのできるような評価のあり方として、どのような方法が有効といえるだろうか。

教育評価に対するもう一方の関心の高まりを、アカ

ウンタビリティとの関連の中に見出すことができる。文部科学省は、小学校設置基準（文部科学省令第14号）において、学校運営の状況についての自己評価とその結果の公表についての努力義務を示した¹⁾。これ以降、教育評価の研究や実施は加速度的に進行している感がある。ここで言う教育評価とは、学校職員が自らの学校・学級経営に対して行う自己評価であり、学校評議員や保護者が学校・学級経営に対して行う外部評価であり、児童生徒が学校・学級経営に対して行う評価である。これらは、評価対象や方法などの点で、冒頭に述べた「学習者にとっての評価」とは性質を異にするものである。しかしながら、一方が変われば他方も同様に変わるという意味で、全ての評価が互いに密接な関連を持つことは言うまでもない。ここでもう一つの問いが生起する。それは「学習者にとっての評価」をアカウントビリティの観点からとらえたとき、評価情報をどのように有効活用し得るのかということである。

本研究は、これらの問いに対して、小学校における実践事例をもとに検討を加えていこうとするものである。

2. 学習自己評価システム構築の試み

2. 1. 学習者にとっての評価とアカウンタビリティ

一般的な意味合いでの教育評価については、基準や実施時期などによって、相対評価、絶対評価、診断的評価、形成的評価などのように分類され²⁾、単独で、あるいはいくつかを組み合わせて様々に用いられてきた。これらの中で、学習者により近い評価方法の一つとして、学習者が自らに対して行う自己評価を挙げることができる。織田は、自らの授業改善を目的として大学における授業実践に学生からの授業評価を導入し、その効果について検討を行っている³⁾。この研究の特色は次の通りである。

- ・ 授業、学生による授業後の評価、評価に対する教員のコメントを、一連のサイクルとしてとらえている。
- ・ 学生が授業後の評価を記入するために「大福帳 (Shuttle Card)」というツールを開発し用いている。

図1 大福帳 (Shuttle Card) ⁴⁾

「大福帳 (Shuttle Card)」を図1に示した。このカード自体は、必ずしも学生の自己評価を目的とするものではないようにも思われるが、記述の際に、学生が授業に対する自己のあり方に対して自然に点検を行うことは十分に考えられることから、自己評価の要素が反映されているととらえることができると思われる。織田は「大福帳 (Shuttle Card)」を導入することによって授業にもたらされたよい影響を「大福帳効果」として次のように示している⁵⁾。

- ① 欠席防止効果・出席促進効果
- ② 積極的受講効果
- ③ 授業理解促進効果・学習定着効果
- ④ 教師に対する信頼感形成効果
- ⑤ 自己変容・努力の確認効果
- ⑥ 授業内容充実促進効果

そして、学生からの授業評価の導入が、授業担当者や学生にどのような影響を与えるかについて、学生への質問紙による調査をもとに検証を試みている⁶⁾。

次に、情報発信やアカウンタビリティといった事柄

が、小学校における学級経営にどのように位置付けられてきたのかについて考察を加えていくことにする。織田は「1970年代のアメリカの学校は、「教育上の責任時代」(ポファム、Popham W.J.,1978)、すなわちアカウンタビリティの時代とよばれた。アカウンタビリティとは、「教育の当事者が社会に対して負うべき教育成果の報告責任」のこと(略)」と述べている⁷⁾。八尾坂は、アカウンタビリティをアメリカにおける教育政策の観点からとらえ、学校に関する説明責任は、測定 (measurement)、報告 (reporting)、学校の種類 (labeling)、救済 (remedies) の四つの基本的要素を包含するとしている⁸⁾。我が国の公立小学校においてこうした考え方が注目され始めたのは近年のことであり、教育現場では、学校自己評価や他者評価を念頭に置き、実際にアカウンタビリティを果たし得る組織や方法の構築が急がれているところであるといえる。

一方、情報発信やアカウンタビリティといった事柄を、学習集団としての学級や学年という視点からとらえると、フォーマルな形態ではないがこれらはむしろ従来から積極的に行われてきた事柄であることが分かる。従来の学級経営では、これらの事柄の実践形態として、懇談会、家庭訪問、学級通信の発行などの方法が用いられてきた。中でも学級通信の発行は、情報発信という観点や、学級担任の裁量を生かしやすい点などにおいて、有効で特色のある手立てといえることができるのではないと思われる。学級通信に掲載される内容はおおよそ次のようなものである⁹⁾。

- ・ 児童に対する教師の思いや願い
- ・ 児童の発言や作品
- ・ 学級や学校での生活の様子
- ・ 授業の様子
- ・ 行事等の告知

また、とりわけ小学校においては、児童の発達段階からみて、通信の発行対象すなわち情報発信の対象が、半ば児童であり半ば保護者であるような形が多く見られる点も特徴的であるといえるだろう。

2. 2. 学習自己評価システムの構築

今までに述べてきたことと小学校の現状とをもとに、学習自己評価システムの構築を試みた。構築に当たった基本的なスタンスは次の通りである。

- ・ 授業評価を、授業改善⇔学習者からの声という一連のサイクルの中に位置付け、日々の授業の中の限られた時間の中で、日常的に実施できるようにすること。
- ・ 評価情報を電子データとして蓄積できるようにすること。
- ・ 学習者や保護者に対して、評価情報の発信を容易に行えるようにすること。

小学校においては、学年によっては学習者である児童が、授業や教育方法そのものを適切に評価できない可能性が少なくないと思われる。また、児童の学校での活動の様子を知りたいという保護者の要求も看過できない。そこで、授業評価に変わる手立てとして、児童の自己評価を活用することにした。これは、学習に

対する児童の満足度や達成感と、授業や教育方法そのものの是非とをほぼ同義とみなすことができるという観点と、発信を意図した際に、評価情報（児童の声や思い）が本人や保護者に届くという点において有効であると考えられたからである。実際の学習自己評価システムは、Microsoft®Excel2002を用いて作成した。



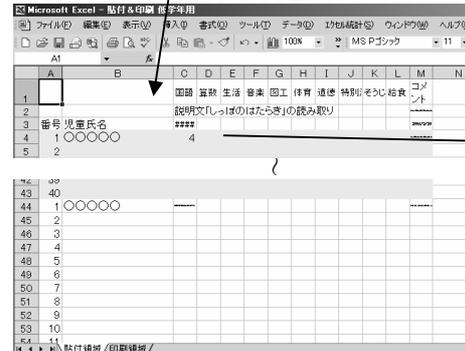
- ※ 各教科及び道徳、特別活動、給食、掃除について、同様のシートを作成した。
- ※ ボタンを動作させるための主なコードは以下の通り (Visual Basic Editor で記述)。

```
Private Sub CommandButton1_Click()
ActiveCell.Value = ActiveCell.Value & "よくできました。"
End Sub
```

```
Private Sub OptionButton1_Click()
With ActiveCell
If OptionButton1.Value = True Then.Offset(0, 0) = 5
End If
End With
OptionButton1.Value = False
End Sub
```

```
Private Sub CommandButton2_Click()
Range("iv3").End(xlToLeft).Offset(0, 1).Value = Date
End Sub
```

上記各シートの入力済み列をコピーし貼り付け



貼り付けた結果が児童数分自動的に反映される (印刷して配布)

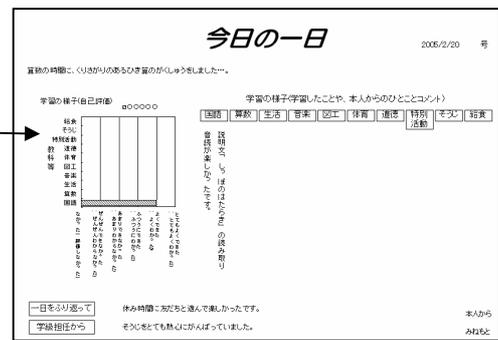
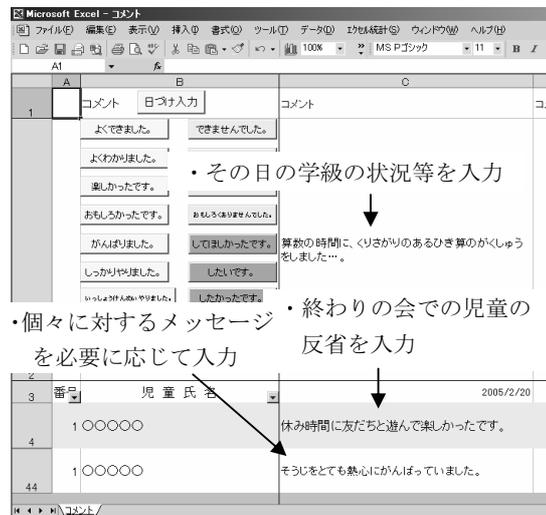


図2 学習自己評価システムの概要と使用方法

- ・ よくせいかつがわかる。
- ・ だれでもみやすくてどんな人でも子どもでもみやすい。
- ・ お手がみをみるとできぐあいやひとことをじぶんがしゃべったことを
かいてくれてパソコンってふしぎなものだとおもいました。
- ・ せんせいは、がんばってきょうの一日をつくっているの、いままでのきょうの一日はずっとのこしておいています。

図4 児童の反応

(「今日の一」をどう思うかの問いに対して2005年1月31日に学級児童が記述したうちの主なもの)

- ・ 保護者から図5及び図6のような反応を得た。

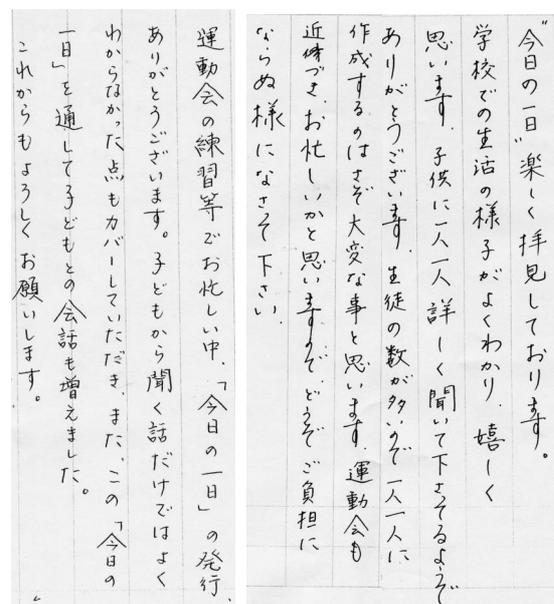
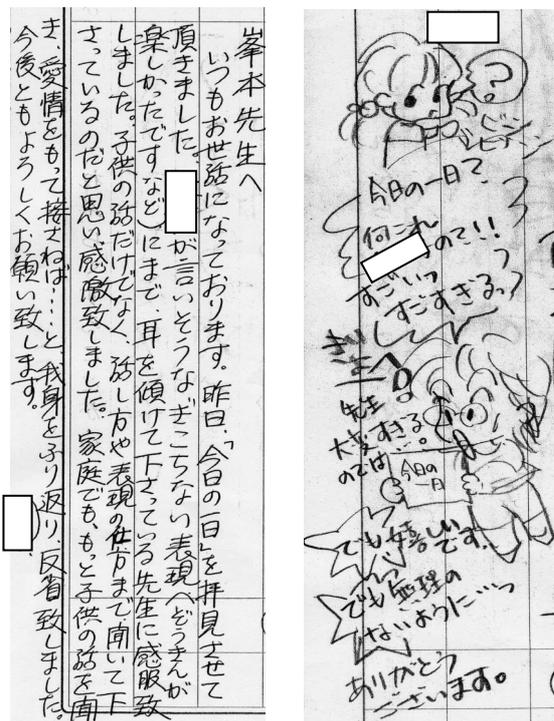


図5 保護者の反応 (システム運用開始時)

- ・ 毎日先生から頂く「今日の一」は、子どもの学校での様子がよく分かり、楽しみにしています。お忙しい中で毎日これを作成されるのは大変だと思いますが、これからも続けていただけたらうれしいです。
- ・ 毎日配布されている「今日の一」、子どもの様子がよくわかり、ありがたく思っています。三学期も引き続き発行をお願いします。
- ・ 「今日の一」のおかげで、学校での様子、先生の考え方がよくわかるようになりました。ありがとうございます。でも、担任がかわればなくなるわけで、さびしく思います。各担任によって、したり、しなかつたりではなくて、低学年の間だけでも、定期的にも、そういったものがあればいいのではないかと思います。
- ・ 「今日の一」を読んで感じるのですが、たくさんの子どもの感想や意見を聞くことは、子どもにとっても大人にとっても「びっくりすることがあったり考えることがあったりしてよいものだなあ」と思います。

図6 保護者の反応 (2学期末)

- ・ 保護者の質問紙への記入という形で行った学級経営診断において、表2に示したような変容がみられた。

表2 学級経営診断における「よく当てはまる」の選択割合(単位 %)

質問内容	1学期	2学期
担任は保護者・地域の願いに応えている。	38.46	48.15
担任は家庭への連絡や意思疎通を積極的に、きめ細かく行っている。	65.38	85.19
学習の内容や進度等を、懇談や学年だよりなどによってよく知ることができる。	50.00	77.78

3. 3. 学習自己評価システムの運用 (高学年)

このシステムの運用を次のように行った。

- (1) 運用期間 2005年5月25日～2005年7月19日
- (2) 対象 担任する5年生児童38名とその保護者
- (3) 運用の形態

「3. 1. 学習自己評価システムの運用 (低学年)」と同様の運用形態であったが、以下の点に変更を加えた。

- ・ 活動の名称を「学習自己評価」とした。
- ・ 入力支援用のボタン及び印刷の形態を、高学年児童用に若干変更した。
- ・ 「今日の一」という名称の通信の発信対象のウエイトを保護者よりもむしろ児童に置き、児童向けに配布した。ただし、情報の共有及びアカウントビリティの観点から、日々の発信内容には保護者にも必ず目を通してもらうようにした。

3. 4. 学習自己評価システム運用の結果（高学年）

- 表3のような自己評価得点の平均値を得た。

表3 自己評価得点の平均値

(とてもよくできたを5点とし、ぜんぜんできなかったを1点とした 2005年5月25日～2005年7月19日までの値)

教科等	平均	教科等	平均
国語	4.31	図工	4.41
社会	4.20	家庭	4.38
算数	4.40	保健体育	4.22
理科	4.34	道徳	4.19
音楽	4.45	特活	4.22
		総合	4.16

- 児童から図7のような反応を得た。また、児童の反応をその内容によって分類したところ、表4のような量的傾向のあることが明らかになった。

・ 今日の一日は、自分をしっかりふり返れるので「明日はこうしよう」とか「このままけんにつけよう」というしきがたかまった気がします。

・ 今日一日をお母さんに見せたら、いつも「よくがんばってるな」といってくれるから、無くなってほしくはない。

・ 毎日、授業のはんせいや、よかったところなどを言って、次からのめくひょうができていいと思います。

・ いつもお母さんが「見せて見せて」といってよこんで読んでいます。

・ 最後に学級たんじんにからというところがあって「明日もしっかりね」とかいろいろなコメントを書いてくれるから「今日一日」がもどってくるのが楽しみです。

・ 学級担任からの所を「特にありません」じゃなくてももっとちがうことをかいてほしいです。

・ 先生が自分で考えて書く上のところ（学級の状況など全体へのメッセージを記述する部分）を見るのが楽しみ！

・ 一日もかかさず作ってくれてうれしい！

・ 「今日一日」というやつをやって「明日はわすれ物をしないようにしたい」などいろいろなことを言っていると、どんどんわすれ物をしなくなったり、給食を4年のときよりものこす量がへってきたので「今日一日」は、これからもつづけていきたい。

・ できぐあいとかも、さいしょの方は「ふつう」が多かったけど、次は、もっとがんばろうという気持ちになるからいいと思う。

・ コメントをもらうと、明日もがんばろうと思うからうれしい。

・ 「今日一日」をしていたら、少し先生とも話やすくなった。

図7 児童の反応

(「今日一日」をどう思うかの問いに対して2005年7月1日に学級児童が記述したもの)

表4 児童の反応の傾向

(複数回答で5名以上の者が共通して記述した内容と記述した人数)

内 容	人数
自己評価を以後の活動に反映できるのでよい	6
学習内容を振り返ることができるのでよい	10
自己の学習参加の状況を点検できてよい	10
保護者に学校の様子が分かったり、保護者からほめられたりするのでよい	6
グラフやコメントがよい	13
(分かりやすい、楽しい、もらってうれしいなど)	
担任からの個別のコメントを増やしてほしい	17
(自己評価聴取以外の)授業時間が減り心配	6
イラストを入れてほしい	5

- システム運用開始前後の各教科学力テスト平均点に対してt検定を行ったところ、表5のような結果を得た。

表5 システム運用前後の学力テスト平均点に対するt検定結果 (N=38)

		運用前	運用後	差	t値
国語	M	86.52	84.77	-1.75	1.60
	SD	9.97	11.88		
社会	M	79.60	79.73	0.14	0.11
	SD	12.35	11.72		
算数	M	85.60	88.33	2.74	1.19
	SD	16.38	11.70		
理科	M	73.91	80.68	6.77	3.87 **
	SD	15.87	12.07		

*p<.05 **p<.01

- 保護者から図8のような反応を得た。

・ 「今日一日」ですが、楽しく見せていただきました。学校での子供の様子が分かり、会話ははずみました。今後ともよろしくお願い致します。

・ 「今日一日」は、子ども達の日その日の様子がよくわかり、また、子どもとの会話のきっかけにもなっています。毎日なので先生も大変だと思いますが、これからも続けていただきたいです。

・ 「今日一日」は、クラスの様子がよくわかります。子供は学校の話をもく話さないで「今日一日」はありがたいです。

図8 保護者の反応

- 保護者の質問紙への記入という形で行った学級経営診断において、表6に示したような選択割合を得た。

表6 学級経営診断における
「よく当てはまる」の選択割合(単位 %)

質問内容	選択割合
担任は保護者・地域の願いに応えている。	37.93
担任は家庭への連絡や意思疎通を積極的に、きめ細かく行っている。	55.17
学習の内容や進度等を、懇談や学年だよりなどによってよく知ることができる。	58.62

4. 考察

学習自己評価システムの運用により教員が得た成果として、次のような点を挙げる事ができる。

- (1) 「学習の振り返り」「学習自己評価」の聴取を通して、個々の児童の思いに目を向けようとする意識を持続させることができた。
- (2) 学習活動に対する児童の傾向や評価情報の発信を意識することによって、日々の授業内容を点検していこうとする意識を持続させることができた。
- (3) 一人一人異なる学習状況に対応する形での個別の自己評価内容を、継続的に発信することができた。
- (4) 比較的短時間での日々の運用が可能であったため、過度な負担を強いられることなく取り組めた。

本稿冒頭に述べた「学習者にとっての評価」をアカウンタビリティの観点からとらえたとき、評価情報をどのように有効活用し得るのかということに対し、教員の視点からは、(1)や(2)のような、授業内容や学習者に対するポジティブな意識の持続という点を挙げる事ができる。また、これらの成果は、ここまで述べてきた一連の評価活動における、次のような点によってもたらされたものであると考えることができる。

- (1) 児童や保護者への公開を前提とした評価の仕組み(システム、評価方法など)の構築。
- (2) 学習活動への評価内容の反映。
- (3) 教員・児童・保護者による評価情報の共有。

このような事柄を、評価情報の発信が学級経営によりよい影響をもたらすようにするのに必要な点と考えることができるのではないと思われる。一方、課題としては、評価情報の継続的な発信は可能であったものの、評価情報を処理するために作成したプログラム(図2参照)のファイルサイズが大きく、使用機器によっては動作が不安定になる場合があったことが挙げられる。汎用性の追求が一つの課題であるといえる。

児童の側からは、次のような成果を挙げる事ができる。

- (1) 比較的高い自己評価得点を維持することができ

た(表1・表3参照)。

(2) 自己評価システムの有効性が示された。それは、学習意欲の持続、学習内容の振り返り、自己の参加状況の点検、次の学習活動への反映の三点に集約されるといえる(図4・図7・表4参照)。

(3) 高学年児童では、システム運用前後の学力テスト得点に変化がみられた(表5参照)。

日々の学習や授業の質が基盤となることは言うまでもないが、(1)から、児童の自己有能感を維持する手立てとして、また(2)から、教育の効果を高める評価のあり方として、児童の自己評価及び、それを効率的に実施・発信するためのシステムの有効性が示されたと考えることができる。(3)については、例えば児童が新しい担任の授業方法に慣れてきたこと、そのときどきの学習内容の難易など、学力テスト得点の向上に対する他の事柄の関与が考えられることから、学習自己評価の実施とその発信が直ちに学力向上に結び付いたと結論付けることはできない。しかしながら、授業改善⇄学習者からの声というサイクルの中で、教員と児童の双方が評価内容を次の授業に反映させようとしたことが、好ましい結果につながったとする一つの根拠にはなり得るといえるのではないと思われる。一方、課題としては、低学年では授業改善の観点からの本システムの一層の活用を挙げる事ができる。これについては、例えば「学習の振り返り」の質に目を向けるような児童への働きかけがより必要となってくるのではないかと考えている。また、高学年では、児童は教員からのコメントをよしとしつつも、個別の応答をより強く求めていることが明らかにされた(表4参照)。これについては、システム運用面での可能性を含めた検討を加えていきたいと考えている。

保護者の側からは、低学年では、児童の学校での活動の様子を知りたいという要求に対する成果を挙げる事ができる(図5・図6・表2参照)。一方、課題としては、高学年児童の保護者に対するアカウンタビリティという観点からの、本システムの一層の活用を挙げる事ができる(図8・表6参照)。これについては、今後システムの継続運営を行いながら、その改善方法を探っていききたいと考えている。

5. おわりに

本研究によって、学習自己評価とその発信は、学級経営に好ましい影響をもたらすことが示された。一連の実践の中で、教員、児童、保護者の三者に共通する事柄として、学習活動や学級の状況に関するよりタイムリーな対話の重要性を挙げる事ができるのではないと思われる。また、とりわけ児童が、学習活動において、その必要性を強く感じていることも確認された。この「対話」という要素の適切な維持継続の如何

が、ともすれば結果による被評価者の能力判定や格付けのみに陥りやすい評価という活動を、教育するという点において一層有効に機能させ得る鍵といえるのではないだろうか。指導方法の改善、教育要求や学習要求への対応という観点から、今後もよりよい評価のあり方を追究していきたいと考えている。

引用参考文献及びURL

- 1) 文部科学省令第14号(2002) 小学校設置基準p.22
- 2) 豊田弘司(2003)『教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』小林出版pp127-150
- 3) 織田揮準(1995)「学生からのフィードバック情報による授業改善－大福帳効果に関する授業実践－」『日本科学教育学会研究会研究報告』第9巻第4号pp.9-14
- 4) <http://ravel.edu.mie-u.ac.jp/~susono/ckaizen-u/daifuku.htm>より抜粋
- 5) 織田揮準(1991)「大福帳による授業改善の試み－大福帳効果の分析－」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』第42巻pp.165-174
- 6) 織田揮準(1992)「『学生による授業評価』の導入に対する学生の態度」『三重大学教育学部研究紀要(教育科学)』第43巻pp.99-105
- 7) 前掲5) p.165
- 8) 八尾坂修(2001)『現代の教育改革と学校の自己評価』ぎょうせいp.32
- 9) 例えば<http://www001.upp.so-net.ne.jp/bittervalley/>
<http://www.interq.or.jp/green/mj23/>などweb上に公開されている学級通信約50例の記述内容をもとに筆者が分析した